



パルヌ音楽祭 2017
(8月10～17日)
Pärnu Music Festival 2017
(10th August- 17th August)

取材・文 後藤菜穂子
Text=Nahoiko Goto

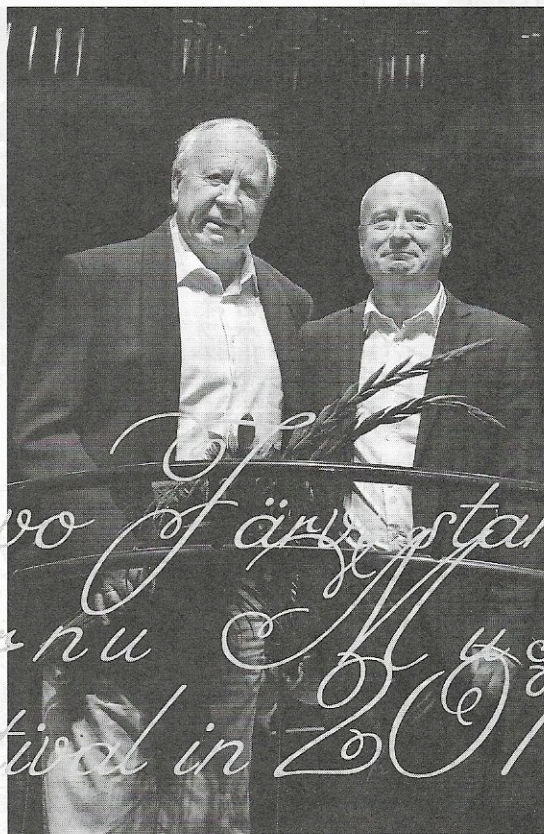
パルヌ音楽祭 2017 今年はネーメ・ヤルヴィの80歳(傘寿)を祝う

バルヌ(Pärnu)、バルヌとも表記は、エストニアの首都タリンから南へ約120キロに位置する同国屈指のリゾート地。エストニア人には「夏の首都」として親しまれ、パルヌ湾沿いに波穏やかな白い砂浜が広がる。リゾート地としての歴史は19世紀にさかのぼるといふことだが、ソ連時代にはオキストラフヤシヨスタコーヴィチらの音楽家も保養に訪れたという。

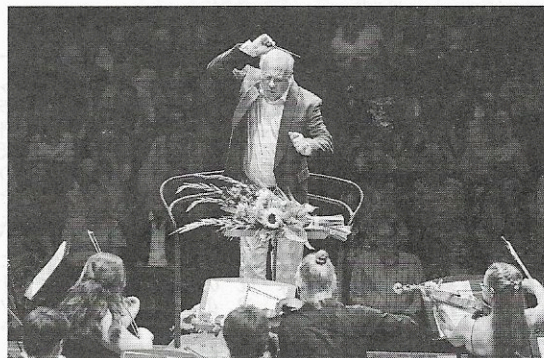
80歳のネーメに捧げられる

この地でパーヴォ・ヤルヴィが音楽祭を立ち上げたのは2010年のこと。当初は、父ネーメ・ヤルヴィがすでに同地で開催していた指揮アカデミーの延長として、小さな規模で始まったが、翌年からフェスティヴァル・オーケストラも結成され、数年のうちに多彩な内容の音楽祭へと発展を遂げてきた。今ではアカデミーは指揮コースのみならず、弦楽器や管楽器のコースもあり、アカデミー・ユース・オーケストラもある(アカデミーは音楽祭の1週間前から開催され、アカデミー生のコンサートは、音楽祭本体に組み込まれている)。

今年の音楽祭(8月10～17日)は、6月に80歳を迎えたネーメ・ヤルヴィに捧げられた。開幕コンサートは、ネーメ自身がタリン室内管弦楽団を指揮し、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン(コリヤ・ブラツァー)独奏によるヴァイオリ



音楽祭を立ち上げた芸術顧問パーヴォ・ヤルヴィ(右)と6月に80歳を迎えた父ネーメ・ヤルヴィ ©Kaupo Kikkas



タリン室内管弦楽団を指揮するネーメ・ヤルヴィ。今年の音楽祭はネーメに捧げられた ©Kaupo Kikkas

ン協奏曲)に加えて、エストニアの作曲家ヤーン・ラーツ(1932年生)の「管弦楽のための協奏曲」が演奏された。ネーメはまた、指揮アカデミーの受講生の発表の場であるユース・オーケストラのコンサートでもタクトを取り、健在ぶりを示した。

音楽祭の主要会場であるパルヌ・コンサートホール(約900席)は、2002年に建設された近代的なホールだが、ネーメはその建設にも尽力し、バルヌに高い水準の音楽をもたらしてくれた人物として市民から感謝されているという。パーヴォは音楽祭の打ち上げで「父ネーメはエストニアのもっとも重要な音楽家かつ文化の象徴であり、彼はここで行なわれているすべての原動力です。私たちは音楽祭のすべての演奏を、彼の感謝と称賛をこめて捧げ

ます」と父を称えた。**躍進する**
エストニア祝祭管弦楽団
音楽祭の中核を担うのは、パーヴォ自身によって選ばれた精鋭メンバーから成る、フェスティヴァル・オーケストラだ。当初はパルヌ祝祭管弦楽団と名付けられていたが、現在は「エストニア祝祭管弦

楽団」と改称され、今年には音楽祭での公演に続いて、北欧への初のツアーを行なった。エストニア独立100周年となる来年1月には、さらに本格的なヨーロッパ・ツアーも予定されており、パーヴォはこのオーケストラをエストニアの親善大使として発展させていきたいという夢を抱いている。

オーケストラのメンバーの約半数はエストニア人（主としてエストニア国立管およびタリン室内管の奏者）で、残りはヨーロッパ各地のオーケストラから理念を同じくする音楽家たちが選ばれている。コンサートマスターはドイツ・カンマーフィルのフロリアン・ドンデラー。またパーヴォの妹のフルート奏者マリーカや、他のヤルヴィ一族の音楽家もいる。日本人のメンバーもおり、去年はヴィオ



パティアシュヴィリをソリストに迎えた最終公演から
©Kaupo Kikkas

ラ奏者の安達真理、今年にはドイツ・カンマーフィルのファゴット奏者の小山莉絵が参加した。初参加の小山は「パーヴォのことが好きで、彼と一緒に弾きたいと

パーヴォ・ヤルヴィ、バルヌ音楽祭を語る —— バルヌ音楽祭およびエストニア祝祭管を エストニアの親善大使に

取材・文 後藤菜穂子
Tokyo Nippon Club

パーヴォ・ヤルヴィはNHK交響楽団の首席指揮者やドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団の芸術監督を務め、日本でもすっかりおなじみの存在だが、母国エストニアで始めたバルヌ音楽祭には特別の思い入れがある。父方の祖母（つまりネーメ・ヤルヴィの母親）はバルヌの出身で、子どもの頃には毎夏、数カ月を過ごしたという。

2010年から徐々に拡大

——バルヌ音楽祭を立ち上げたきっかけ

は。「もともと父ネーメが15年以上前に、この地で指揮者のためのアカデミーを始め

思っている音楽家たちの集まりで、国が違ってもみんな目指しているものが同じなので、迷いなく一致団結できるオーケストラです」と感想を語ってくれた。

名手リサ・パティアシュヴィリをソリストに迎えた音楽祭の最終公演（17日）は、なんと2時間半におよぶ盛りだくさんのコンサート。パティアシュヴィリは、きわめて洗練された解釈のチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」に続き、ジョージアの作曲家カンチエリの幻想的な《V&V》を見事に聴かせ、聴衆を魅了した。後半はシベリウス「交響曲第2番」。祝祭管弦楽団特有の、メンバーが一体となってパーヴォの棒に自在に反応している様には心動かされる。音色の揃ったしなやかな弦楽セクション（対向配置）、ソリストイックな木管の首席奏者たち、そ

たのが発端です。音楽祭は2010年に始まったのですが、徐々に拡大してきました。

まずユース・オーケストラができて、その後、室内オーケストラ、さらに内外から音楽家を招いてフェスティヴァル・オーケストラを創設しました。このオーケストラは大成功を収め、特にエストニアの奏者たちにとって西側のすばらしい音楽家たちと一緒に弾けることが大きな糧となり、彼らも大きく成長してきました。こうしてエストニア祝祭管弦楽団の公演が音楽祭の目玉になったのです。ただ私にとっては指揮アカデミーも音楽祭の大切な一部です」

してパワーのある金管楽器。ドイツ・カンマーフィルのようなエネルギーを持ちつつ、より国際色豊かなオーケストラといってもよいかもしれない。

オーケストラの公演以外にも、オーケストラのメンバーたちによる室内楽やアンサンブルのコンサートが連日組まれていたが、なかでも「エストニア音楽の夕べ」（15日）が興味深かった。回国を代表する作曲家の一人、エリツキスヴェン・トゥール（1959年生）の2曲の「ピアノ三重奏曲」をはじめ、今年亡くなったヴェリヨ・トルミスの《聖ヨハネの四重奏曲》が印象に残った。現代音楽のみのコンサートが、当然のように夜のメイソンのプログラムに組まれ、好奇心旺盛な聴衆が耳を傾けている雰囲気もとても好ましく感じた。

——今後エストニア祝祭管弦楽団をどのように発展させていきたいですか。

「このオーケストラが広く認知され、エストニアのオーケストラの親善大使として、ヨーロッパの主要なコンサートホールや音楽祭に招いてもらえるようにしたいと思っています。今年は、バルヌでの音楽祭のあとに北欧への初のツアーを行い、来年1月にはウィーンやベルリン、ブリュッセルなどヨーロッパの主要都市へのツアーがあります。そして2019年4月には、日本を含むアジア・ツアーを予定しています。私たちが目指しているのは、機敏でフレキシブルな音楽家のグループを作ることであり、そのうちの



最終公演でのパーヴォ・ヤルヴィ © Kaupo Kikkas

ここでの私たちの音楽作りは仕事ではなく、喜びであってほしいのです

半分はエストニア人から構成され、残り私が知っている外国の音楽家の中からベストな人材を選びます」

——メンパーはどのように選んでいるのでしょうか。

「私が求めているのは、音楽を心から愛していて、才能と情熱を合わせた音楽家です。経験はそれほど重要ではないと思っています。ここでの私たちの音楽作りは仕事ではなく、喜びであってほしいのです。またここで出会った音楽家たちがお互いに仲良くなり、音楽祭をきっかけに交友関係を広げてほしいと思っています」

思い入れのある場所、パルヌ

——パーヴォさんにとってパルヌは思い入れのある場所なのでしょうか。

「ええ、私たち家族にとっては特別な場所です。私の父方の祖母（ネーメの母）はパ



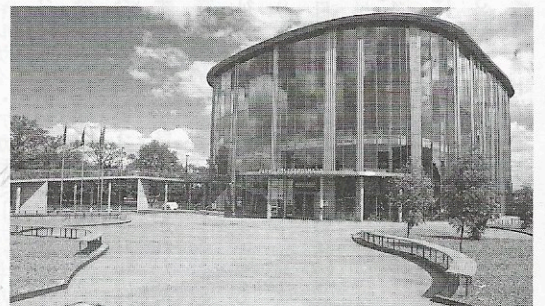
パーヴォが7歳の時に、パルヌでシヨスタコーヴィチに会った時の写真

ルヌの出身でしたので、私たちは子どもの頃、毎夏ここで数カ月を過ごし、海で泳いだり自然の中で遊んだりしました。

ソビエト連邦時代には、オイストラフやシヨスタコーヴィチ、ハチャトゥリアンら偉大な音楽家たちがパルヌに保養に訪れました。私も子どもの頃に彼らに会っていて、7歳の時にパルヌでシヨスタコーヴィチに会った時の写真もあります。だからこそ、ここで何かを始めたいと思ったのです」

——パルヌの人々は音楽祭をどのように受け入れてきましたか。

「地元の人々にも定着してきました。パルヌは基本的に夏のリゾート地なので、冬の間は閑散としていますし、今まではほとんど文化がなかったのです。今では夏にパルヌに来る観光客たちも、昼間は海水浴に行き、夜はコンサートに来ることができます」



音楽祭の拠点、コンサートホール。ネーメをはじめとする文化人たちが当時の市長に働きかけ、2002年に街の中心地に建設された

——コンサートホールはいつ建てられたのですか。

「2002年に建てられました。父ネーメをはじめとする文化人たちが当時の市長に、パルヌ市が発展していくためにはコンサートホールが必要だと働きかけ、街の中心地に建設されました。ホールは音楽祭の拠点であり、コンサートもリハールも、指揮アカデミーも基本的にここで行なわれます」

『ブティック音楽祭』を目指す

——今年はネーメさんのお誕生日を祝した音楽祭だそうですね。

「はい、音楽祭全体が父ネーメに捧げられています。エストニア人にとって父は英雄的な存在ですし、また特にパルヌとは、母親を通じて強い結びつきを持っているので、80歳の誕生日をこの地で祝うのはふさわしいことだと思います」

——そして来年はエストニアの独立100周年でもあります。

「そうですね。このことは私たちが独立国としていかに若いかを示していると思います。1918年に最初に独立してから100年なわけですが、その後ロシアにまた占領され、1991年に再び独立したわけです。エストニアという地は12世紀から存在していましたが、周辺の大国にとって戦略的に好位置だったため、ドイツ、デンマーク、ロシア、スウェーデンなどに征服されてきました。でもエストニア語というのはずっと話されていて、失われたことはありません。私も子どもの頃から、家庭ではずっとエストニア語を話していました。

——今後、どんな音楽祭を目指していますか。

「私自身は、パルヌを大きな商業的な音楽祭にはしたくなくて、いわば『ブティック音楽祭』を目指しています。すなわち、水準の高い音楽作りをしながら、必ずしもスターばかりではない音楽祭です。もちろん、今年のようにラドゥール・ブーヤリサ・バティアシヴィリのような素晴らしい音楽家が来てくれる年もありますが、それは彼らが友達として来てくれているのです。

将来的にはパルヌがリゾート地としてだけではなく、名高い音楽祭のある町として知られるようになり、パルヌ音楽祭およびエストニア祝祭管弦楽団がこの国の音楽および文化の親善大使になることが私の夢です」